
僕は貴女に私はあいつに

伊藤勇作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は貴女に私はあいつに

【Nコード】

N7876D

【作者名】

伊藤勇作

【あらすじ】

私の名前は明善棗、あいつの名前は鏡家俊一、幼馴染でもあるし、私の執事でもある。そんな私とあいつのちょっと変わった関係の物語です。

（前書き）

これは自分にとって始めての短編。
出来れば感想と評価をお願いします。

「もう一体何やってるの!？」

日曜日の朝から怒鳴り声が響く。

原因は、あいつが私の部屋においてあった花瓶を倒したからだ。

「す、すみません!」

見た目は私と同じくらいで、気の弱そうな少年が、何度も頭を下げながら謝っている。

何回も頭を下げて、下げて、下げて……って下げすぎだ!?

「もう良いから他の所に行ってきなさい」

呆れたように私が言ったら。

「でも僕はお嬢様の……」

「いいから口答えしない」

「でもまだ……」

あーっ!!もういいって言っているのに!?

「行きなさい!これは主^{あかじ}の命令よ!」

私がつく言ったら、あいつは流石に諦めた。

「は、はい！分かりました」

その少年は怖ず怖ずしながら下がって行き、出て行く瞬間に一言だけ言った。

「……すみませんでした。お嬢様」

そう呟いて彼は出て行った。

「……はあ」

何となくため息が出る。

私ってそんなに怖いのかな？

とちよつと落ち込んだりしながら、あいつの事を考えた。

あいつの名は鏡家かがみや 俊一しゅんいち

この私、明善めいぜん 棗なつめの執事をやっている。

歳は私と同じ十五歳

あいつは小さい頃からここに一緒に住んでいる。そのため、幼馴染と言ってもあながち間違いない。何でもここに住んでいるのかというと、あいつの父親が、私の父の執事をしている。そのため、住み込みで親子と一緒にすんでいると言う訳だ。

所で、なんで彼が私の執事をしているのかと言うと、これにも色々理由があるのだが、まあ分かりやすい理由を一つ挙げると修行のためである。鏡家の子供は十二歳になると、立派な執事・メイドになるべく修行しなくてはなららしい。そのための修行場として、現在私の執事をやっている。

だけどね……あいつ……執事に向いてないんだよね

周りを見てみると倒れた花瓶、散らかった服、バラバラに落ちている本。

これらはいつが朝、私を起こしに来た時に色々失敗してこうなったのだ。

「・・・はあ」

なんであいつが私の執事なんだろう

私は執事なんて欲しいと思わない

それに・・・私はあいつの言い方が気に入らない！！

昔は棗って呼んでいたのに・・・急にお嬢様って呼ぶようになったんだよ！！

確かに私はあいつの主だけど・・・あれはないでしょう！？あれは！！

あいつ、執事になった途端急に態度が変わったんだよね・・・本当に・・・なんでこうなっちゃったのかな？

「はあ・・・」

何か色々考えていたら少し泣きたくなってきた。

けど、これだけは言える。

私は執事なんて要らない！

だから少しだけ、本当に少しだけいいから・・・私に構ってほしい。

好きな人に・・・ちゃんと構ってほしい。

そう思いながらベットに転がった。

「はあ、また怒られたな・・・」

毎度の事だが、かなり落ち込む。

本当はちゃんとして褒めてもらうべきなんだろうけど・・・

「・・・はあ」

褒めてもらうどころか嫌われてるんじゃないかな？

自分で疑問に思った言葉にさらに落ち込む。

・・・どうして僕が執事をやっているんだろ？

ただでさえ鈍臭い僕が執事に向いているはずない。

まあ、うちの家系がエリート執事・メイドってのは分かるけど・・・

・どうも僕は向いてないような気がするんだよな。

それに・・・いつも棗に迷惑をかけてるし。

「・・・はあ」

ため息しか出てこない。

昔だったらこんな事には悩む必要なんてなかっただろうな。
と少し昔の事を思い出しながら・・・懐かしむように笑った。
昔はただの泣き虫だったのに・・・あんなに可愛くなちゃって。
そう言えば、その頃はまだ棗の事をお嬢様と呼んでいなかったよ
な・・・

色々思い出してちょっと懐かしくなったな。
ま、こうなってしまったからには真面目にしないと。

「さて・・・午後の仕事に入るかな」

それに・・・まだ棗の執事だからいいかな。
そう考えたら、まだ少し嬉しい。

・・・だけど。

「今の僕は執事だからな」

少し悲しそうに空を見てから呟いて、棗のいる部屋に向かった。

「……ん？」

あたりは暗く月明かりのみで、部屋の電気がついていない。
もしかしてあの後寝ちゃった？

一日中寝てた？

貴重な休みの日を泣き寝入り？

……恥ずかしいな。

顔が赤くなるのを感じながら急いでベッドから出る。

……出る？

「あれ？」

そう言えば私いつの間にベッドの中に入ったわけ？

それに周りを見たら、朝の悲惨な状態とは違って部屋が片付いる。

「うーん、奇怪現象でも起きたのかな？」

そう思いながら部屋の電気スイッチの方を見たら、スイッチがある
場所に、誰かがイスに座っていた。

「……誰？」

ここからだとも月光の影になって見えない。
少し見える部分だけ推測すると多分男。

「何か言いなさい!!」

少し怖くなって大きな声を出した。

「……………」

しかし相手はなんの反応を示さない。
……………あら？

「もしかして寝てる？」

恐る恐る近づいてみたら……………

「……………寝てる」

イスに座って壁にもたれるようにスヤスヤと寝ている。
しかも、その人物は鏡家俊一であった。

「驚かせないでよ」

寝ている人物に言っても仕方がないが、一応文句だけは言うておく。

「……………」

なんだか寝顔を見てたら変な気分になってきた。
微妙に頬を赤くしながら、周りをきよろきよろと見渡し……………

「よし、誰もいない」

微妙に挙動不審になりながらも、彼の隣の空いている席に座った。

「うわぁ……………」

距離が近い。

しかも、いつもと違って無防備だ。

俊一を見ていると、自分の顔が熱くなるのが分かる。

それに……………可愛い。

中性的な顔だからかもしれないけど、寝ている姿はなんというか・

・愛らしい。

まあそんな事を言ったら多分拗ねちゃうと思うけど、実際そうなのだから仕方がない。

「うふふふ」

何か得した気分だ。

それに私が寝ている間に色々としてくれたんだろう、現に私の部屋は見事に綺麗になっている。

……………何かお礼をした方が良いのかな？

俊一の顔を見ながら考え……………良い方法を思いついた。

……………少し恥ずかしいけど……………寝てるから大丈夫だよね。

さらに自分の顔が赤くなるのを感じながら……………

「……………今日はありがとうね」

俊一の額に軽くキスをした。

……………願わくば、俊一が執事でなく、自分の意思で私の側に居る

ことを。

なんだか不思議な夢を見た。

棗が僕にお礼を言いながら、キスする夢を……

だけど……別に嫌じゃなかった。

自分でも分からないけど、とても嬉しい気分だ。

こんな夢が見られるなら、あらかじめ予め、棗が寝ている間に部屋を片付けて置いてよかったと思う。

こんな夢のように……明日は褒められるように頑張ろう。

棗のためにも、明日が良い日になりますように。

（後書き）

この作品は本来長編（連載）物として出すはずだったのを、短編にしたものです。
もし評判が良かったら、ちゃんとした連載物にしたいと思います。

B
y
伊

藤勇作

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7876d/>

僕は貴女に私はあいつに

2010年12月29日02時15分発行